

いじめ体験によるレジリエンスと アサーションの関連について

The Relation between Resilience from Experiences of Bullying and Assertion

相 田 早 織

Saori AIDA

(日本女子大学大学院人間社会研究科 心理学専攻博士課程前期1年)

要 約

レジリエンスとアサーションは、いじめ被害体験者を対象とした研究が中心にされており、いじめ加害体験者や傍観体験者を対象とした研究が少ない。本研究では、児童期・青年期前期のいじめ加害体験・傍観体験、そして被害体験を含む過去のいじめ体験の有無によって、その後のレジリエンス達成とアサーションがどのように異なるのかを検討した。

大学生を対象に質問紙調査を行った結果、いじめの被害、傍観、加害体験全てを経験した群（以下いじめ体験全てあり群）が傍観体験のみを経験した群よりも人生の肯定ができていないことが明らかになった。さらに、いじめ体験全てあり群は、被害体験のみを経験した群よりも、葛藤場面において相手との衝突を回避するため自分の気持ちを押し殺してしまうことが明らかになり、被害や傍観、加害体験をすべて経験した者への心理的ケアの重要性が示唆された。

[Abstract]

The researches of resilience from bullying and assertion have mainly been conducted for victims. It is scarce to target at bullies and bystanders. This study is that how differently resilience and assertion have been affected by whether there has been the past experiences of bullying at childhood and early-adolescent, or not. Especially this research was carried out from each different situation, including bullies, bystanders, and victims.

As a result of questionnaires for university students, it was found that the group having the experiences of bullying as bullies, bystanders, and victims has more negative thinking on his/her future life than the group having the experiences as only bystanders. Moreover, the group having the whole experiences tends to suppress their feelings to avoid conflicts when facing difficulties in relationships with other people. In consequence, this study suggested that psychological treatments should be significant for the group having the whole experiences of bullying.

問題と目的

近年、学校生活場面での「いじめ」が問題視されるようになった。「いじめ」とは、文部科学省が2006年に、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わない」と定義しており、いじめに当たるか否かの判断は、表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行うものとしている。

内閣府は、平成26年度版子ども・若者白書にて「学校により認知されたいじめは、平成24年度は198,109件と前年度の2.8倍に増えた」と発表した。学校に認知されていないいじめも多く起こっていると推測することができることから、年々増加傾向にある「いじめ」は我が国で早急に防ぐべき課題になっており、さらにいじめを受けた者への心理的ケアやサポートの重要性も叫ばれている。

しかし、周囲のサポートによりいじめが終結したとしても、被害者に長期間影響を及ぼすことがわかっている。坂西(1995)は、大学生に過去のいじめ被害体験の振り返りをさせ、その後の影響を調べた。その結果、いじめ被害体験者は、いじめを受けてから長期間を経た後でも心理的・身体的にネガティブな影響を受けていることがわかった。さらに、いじめ被害の体験が強ければ強いほど、長期的な影響も強くなっていることも明らかになった。

一方で、坂西(1995)は上記の調査にて、いじめ被害体験は本人にとってすべて否定的な影響しか与えていないと受け止められているかといえ、必ずしもそうではないとも述べている。いじめられた体験から相手の気持ちをよく考えられるようになり共感性を高めたり、負けず嫌いや我慢強くなったりするなど、いじめ被害体験を通して、逆境に負けない積極的な意味を見出そうとすると坂西(1995)は調査から明らかにした。

このように、逆境にまけない、または逆境から立ち直るという点において、深刻なストレスイベントと発達あるいは適応状態との間の媒介変数に関する概念として、近年「レジリエンス(resilience)」という概念が注目されてきた。レジリエンスは、「弾力性」、「跳ね返り」、「復元力」、「回復力」などと訳されており、日本語表記においてもレジリエンス、リジリアンス、リジリエンスなど統一がされていない。

また、レジリエンスの定義についても各研究者間によって一致がされていない。荒木(2005)によると、現状において、様々なものが並立している状態にあるレジリエンスの定義を大別すると、レジリエンスをプロセスあるいは結果として定義する立場(Luthar, Cicchetti&Becker,2000; Masten&Reed, 2002等)と性格特性として定義する立場(Jew, Green&Kroger, 1999; Wagnild&Young, 1993等)に分けられると述べている。

プロセスあるいは結果として定義する立場(Luthar et al, 2000)では、「著しい逆境下に置かれているにもかかわらず、良好な適応が達成されている動的な過程」といった定義がなされている。これに対して、性格特性としてのレジリエンスは、ストレスイベントに対して高い耐性を有することを指す。

荒木(2005)は、レジリエンスを「児童期及び青年期前期にある一定の期間に、いじめというストレスイベントに曝されたにもかかわらず、被害後数年が経過した青年期後期においてそれらの後遺症とも言える不適応状態(抑うつ、不安など)を呈していない状態」と定義し、いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンスと適応状態について調査した。その結果、いじめ被害体験者は青年期後期において、特にストレスイベントを多く経験しているわけではないにもかかわらず、非被害体験者、つまりいじめ被害体験をしていない者と比べて適応状態が悪いことが明らかになった。そして、特に対人場面において他者からネガティブな反応を引き起こさないように努めて振舞うことが適応状態を悪化させる可能性が示唆された。

以上のように、いじめ被害体験者は、自身の過去の経験から相手から嫌われないように自分の

本音を隠したり、相手に合わせて行動したりしてしまうことがあるなど、対人場面において相手と良好な関係を保とうと敏感になり、さらにストレスをかけてしまい、自身を蔑ろにしてしまうことがわかった。

ところで、他者との良好な関係を維持しつつ、自分を適切に表現する対人スキルのひとつとして「アサーション (assertion)」という概念がある。この概念は「自己主張」と訳され、自己表現のあり方を示すものである。Alberty, R. E. & Emmons, M. L. (1975) は、人間関係の持ち方には、自分だけを大切にし、相手の気持ちを踏みにじるやり方、自分よりも他者を大切にするやり方、自分のことも相手のことも大切にするやり方の3つがあると述べた。平木 (1993) はこれを参考に、それぞれの人間関係の持ち方を「攻撃的」、「非主張的」、「アサーティブ」と呼んだ。平木 (1993) によると、アサーティブな自己表現とは、「自分の気持ち、考え、信念などを正直に、素直にその場に相応しい方法で表現し、相手にも同じように発言することを奨励しようとする態度」であると述べている。つまりアサーションとは、自分も相手も大切にしたい自己表現方法と言えるだろう。

以上をまとめると、荒木 (2005) の研究から、いじめ被害体験者は過去に経験したいじめ被害体験からのレジリエンスの達成がうまくいっておらず、相手のことを気にしすぎてしまい、相手とアサーティブなやり取りができていないことが示唆された。

このように、レジリエンスとアサーションは、いじめ被害体験者を対象とした研究が中心にされており、いじめ加害体験者や傍観体験者を対象とした研究が少ない。岡安・高山 (2000) の研究で、いじめ加害体験者にはいじめ加害後に不機嫌・怒りや無気力のレベルが高い者が多く、さらに教師との関係が良好でない者が多いことが明らかになり、さらに、齋藤 (2000) の研究から、いじめ傍観者は加害者からの同調圧力や被害者への優越感が存在すると推測されたことから、いじめに加担してしまった者、そして見て見ぬ振りをしてしまった者も過去の経験からのレジリエンス達成や現在の対人スキルに何らかの影響を及ぼしていることが推測できる。

そこで本研究では、児童期・青年期前期のいじめ加害体験・傍観体験、そして被害体験を含む過去のいじめ体験の有無によって、その後のレジリエンス達成とアサーションがどのように異なるのかを検討する。

なお、本研究では荒木 (2002, 2005) の研究を参考にし、レジリエンスを「児童期及び青年期前期のある一定の期間に、いじめというストレスイベントに曝されたにもかかわらず、被害後数年が経過した青年期後期において、過去の経験を客観的に受け止めてポジティブな方向へと認識できるようになった状態」と操作的に定義する。

方法

1. 調査参加者と手続き

本研究では大学生 110 名を対象に質問紙調査を行った。質問紙は授業時間中または個別に配布し、調査参加者に回答を求めた。どちらもにおいても調査参加者に質問紙の枚数を確認させた後、調査者が調査の目的を説明した上で協力は任意であること、完全無記名であることを口頭において、また質問紙の表紙に記載をし、教示した。授業時間中に配布した質問紙は授業後に回収し、個別に配布した質問紙は回答が終了した時点で調査者が回収、あるいは調査参加者に指定された

場所へと提出させた。回収した質問紙から記入漏れ等のあるものを除き、104名分のデータが分析の対象となった。

2. 質問紙の構成

(1) レジリエンスの測定

レジリエンスは Jew,Green&Kroger(1999) によって作成された尺度を荒木剛 (2002) が翻訳したものを使用して測定した。全体の項目から 19 項目を使用した。これらは荒木 (2002) の研究を参考に、「愛他的信念」、「人生の肯定」、「“愛される価値” の確信」の 3 因子からレジリエンスを測定するものである。

「愛他的信念」因子は、「誰かが困っていれば助けになれる」、「私の学んだことを人々のために役立てたい」などの他者の幸福や利益を優先する信念に関係した 9 項目から構成される。

「人生の肯定」因子は、「希望に満ち溢れている」、「人生はいいものだ」などの自分の将来についてポジティブな評価をしていることに関係した 8 項目から構成される。

「“愛される価値” の確信」因子は、「自分を愛してくれる人がいるはずだ」、「何をしようと自分を愛してくれる人がいるはずだ」といった、自分は他者から愛されていると確信をもっていることに関係した 2 項目から構成される。

回答は「非常にそう思う」を 6, 「全然そうとは思わない」と 1 とした 6 件法でレジリエンスを測定した。

(2) アサーションの測定

アサーションは、玉瀬ら (2001) が作成した青年用アサーション尺度を使用して測定した。全体の項目から 16 項目が分析の対象となった。玉瀬ら (2001) によると、この尺度は、人とよい関係を形成することに関連した「関係形成」因子の 8 項目と何らかの葛藤した場面において相手に説得や交渉を試みることに関連した「説得交渉」因子の 8 項目からアサーションを測定するものである。

回答は「必ずそうする」を 5, 「まったくそうしない」を 1 とした 5 件法でアサーションを測定した。

(3) いじめ体験の有無や種類についての質問

調査参加者の身の回りで起こったいじめについて、どのような形でいじめを体験したかを尋ねた。「被害」、「傍観」、「加害」、「どれもなし」という 4 項目の中から調査参加者に選ばせて記入させた。

いじめ体験の種類が被害体験のみや傍観体験のみなどと 1 種類だけではなく、被害体験と傍観体験、被害体験と加害体験など体験したいじめの種類が複数にわたり、複雑化していることを考慮し、調査参加者が過去に経験したいじめの種類を複数回答可能にして回答させた。

(4) いじめ体験後の精神的変化の測定

坂西 (1995) が作成した「いじめ被害後の精神的変化についての自己評定」尺度から 9 項目を使用した。坂西 (1995) の研究から、「相手の気持ちをよく考えられるようになった」、「我慢強くなった」、「負けず嫌いになった」の 3 項目から構成されるいじめ体験後の積極的な内容、つまりポジティブな精神的変化と、「体に不調を感じるようになった」、「勉強や遊びなどのいろいろな活動に意欲がなくなった」、「人との付き合いが消極的になった」、などの 6 項目から構成されるいじめ体験後の否定的な内容、つまりネガティブな精神的変化の 2 因子から測定した。

この質問項目は、上記の「いじめ体験についての有無や種類についての質問」の際に「被害」、「傍観」、「加害」のいずれかをひとつでも選択した者に記入させた。

結果

1. いじめ体験によるグループ分け

表 1. 調査参加者のいじめ体験の有無

いじめ体験あり	いじめ体験なし	合計
82 名 (78.9%)	22 名 (21.1%)	104 名

はじめに、調査対象者のいじめ体験の有無をまとめ、またその種別によりグループ分けをした。表 1 には、調査参加者のいじめ体験の有無について示した。表 1 によると、被害、傍観、加害体験のいずれかのうち、ひとつでもいじめ体験をしたことがある調査参加者（以下いじめ体験あり群）は 104 名のうち 82 名 (78.9%)、いずれの体験もしたことが無い者（以下いじめ体験なし群）は 22 名 (21.1%) であった。

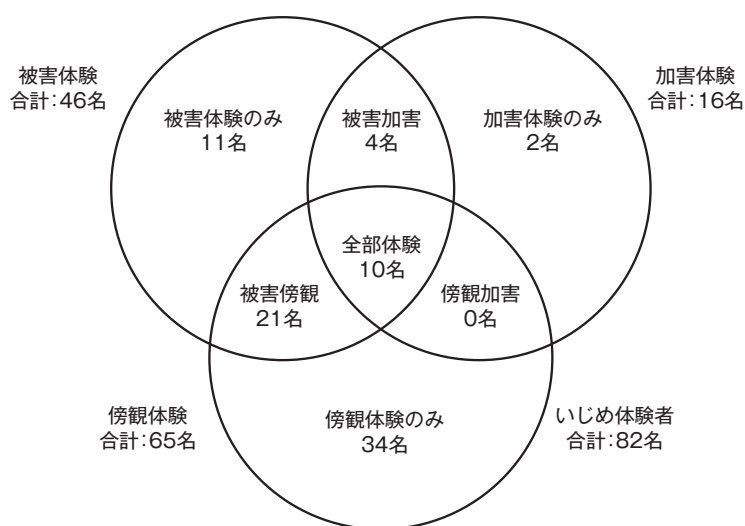


図 1. いじめ体験者の内訳

図1には、82名のいじめ体験者の内訳について示した。図1によると、被害、傍観、加害体験のいずれかひとつでも体験をした82名の調査参加者のうち、被害体験をしたことがある者（以下被害体験あり群）は46名であった。また、傍観体験をしたことがある者（以下傍観体験あり群）は65名、加害体験をしたことがある者（以下加害体験あり群）は16名であった。

被害体験あり群は、傍観体験や加害体験など種類を問わず、他のいじめ体験をしていても被害体験をしていればこの群に含まれる。同様に、傍観体験あり群、加害体験あり群についても、傍観体験あり群は傍観体験、加害体験あり群は加害体験をしていれば、他の種類のいじめ体験を経験していてもこの群に含まれる。

また、被害体験のみをした者（以下被害体験のみ群）は11名、傍観体験のみをした者（以下傍観体験のみ群）は34名、加害体験のみをした者（以下加害体験のみ群）は2名であった。

さらに、被害体験と傍観体験をした者（以下被害傍観体験群）は21名、被害体験と加害体験をした者（以下被害加害体験群）は4名、傍観体験と加害体験をした者（以下傍観加害体験群）は0名であった。

最後に、被害体験、傍観体験、加害体験の全てを体験した者（以下いじめ体験全てあり群）は10名であった。

上記のように、調査参加者をいじめ体験の種別により、いじめ体験あり群、いじめ体験なし群、被害体験あり群、傍観体験あり群、加害体験あり群、被害体験のみ群、傍観体験のみ群、加害体験のみ群、被害傍観体験群、被害加害体験群、傍観加害体験群、いじめ体験全てあり群の12群に分けた。

しかし、加害体験のみ群の調査参加者が2名、被害加害体験群の調査参加者が4名、傍観加害体験群の調査参加者が0名とサンプル数が少なかったため、以下では10人以上で構成されている残りの9群で分析を行った。

2. いじめ体験あり群における「いじめ体験後の精神的変化」の因子ごとの差

「いじめ体験後の精神的変化」において、先行研究である坂西（1995）の研究結果から、質問項目が「否定的な内容」と「積極的な内容」の2つの因子構造に分かれていることを参考にし、いじめ体験後の精神的変化の各因子の平均値において、被害体験あり群と被害体験なし群、傍観体験あり群と傍観体験なし群、加害体験あり群と加害体験なし群の各群間に有意な差があるかを確認するためにt検定を行った。

なお、「いじめ体験後の精神的変化」は、いじめ体験をしたことがある者を対象に回答をさせたため、いじめ体験なし群は分析の対象に入っていない。

さらに、「否定的な内容」因子と「積極的な内容」因子のそれぞれの平均値において、被害体験のみ群、傍観体験のみ群、被害傍観体験群、いじめ体験全てあり群の4群間において有意な差が見られるかを確認するために一元配置分散分析とTukey-Kramer法を用いた多重比較分析を行った。

(a) 「否定的な内容」因子

t検定の結果、いじめ体験後の精神的変化の「否定的な内容」因子を含む質問項目の平均値に

において、被害体験あり群と被害体験なし群の間において有意な差がみられた ($t=-8.51$, $df=80$, $p<.01$)。

表2には、被害体験あり群と被害体験なし群の人数、いじめ体験後の否定的な内容の精神的変化の平均値、標準偏差 (SD) と t 検定の結果を示した。表2によると、被害体験あり群の平均値が 17.65、被害体験なし群の平均値が 10.92 だった。

以上のように、被害体験あり群の平均値が被害体験なし群の平均値より高いことから、被害体験がある者は、被害体験がない者よりいじめ体験後において否定的な精神的変化が大きかったことがわかった。

表2. いじめ体験後の否定的な内容の精神的変化における被害体験あり群と被害体験なし群の人数、平均値、標準偏差 (SD) および t 検定結果

	人数	平均 (SD)	t 値
被害体験あり群	46	17.65(3.12)	-8.51**
被害体験なし群	36	10.92(4.05)	

** $p<.01$

しかし、傍観体験あり群と傍観体験なし群、加害体験あり群と加害体験なし群の各群間では有意な差はみられなかった (傍観体験あり群と傍観体験なし群: $t=1.42$, $df=80$, $n.s.$, 加害体験あり群と加害体験なし群: $t=-1.49$, $df=80$, $n.s.$)。

表3. いじめ体験あり群の各群におけるいじめ体験後の否定的な内容の精神的変化の平均値の一元配置分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F	P 値
いじめ体験の種類	863.43	3	287.81	22.40	.000**
誤差	925.25	72	12.85		
合計	1788.68	75			

** $p<.01$

さらに、被害体験のみ群、傍観体験のみ群、被害傍観体験群、いじめ体験全てあり群の4群間において、いじめ体験後の否定的な内容の精神的変化の平均値に有意な差がみられるかを確認するために一元配置分散分析を行った結果、4群間で有意な差がみられた ($F(3,72) = 22.40$, $p<.01$)。

表3には、被害体験のみ群、傍観体験のみ群、被害傍観体験群、いじめ体験全てあり群の4群間の一元配置分散分析結果を示した。

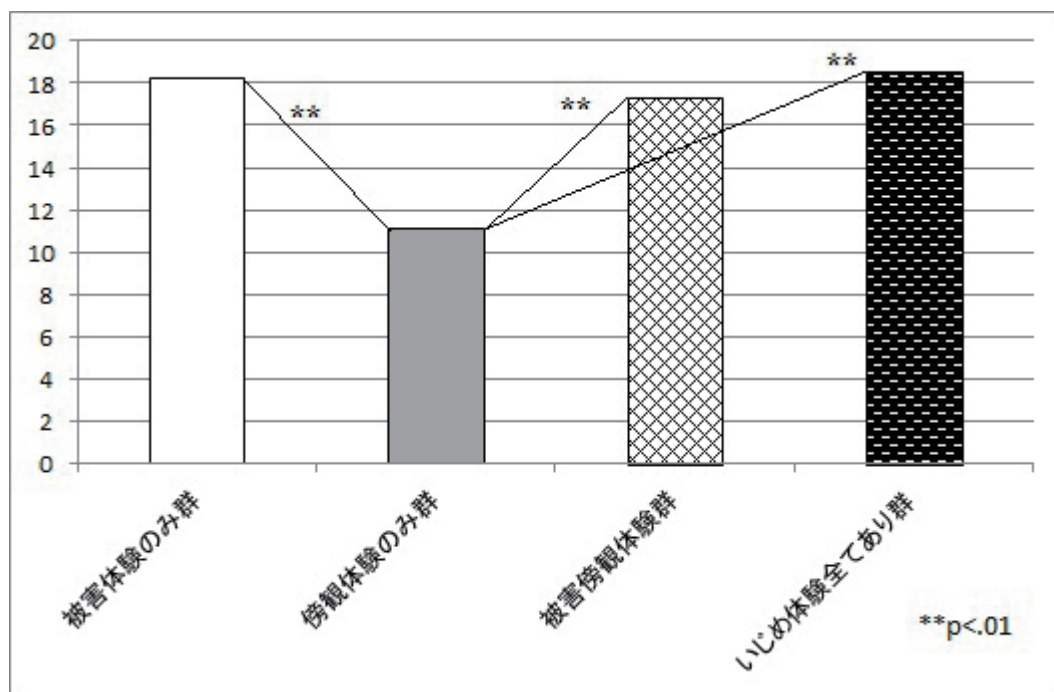


図2. いじめ体験あり群の各群におけるいじめ体験後の否定的な内容の精神的変化の平均値の多重比較分析結果

表4. いじめ体験の種類ごとの各群の人数といじめ体験後の否定的な内容の精神的変化の平均値

いじめ体験の種類	人数	平均値 (SD)
被害体験のみ群	11	18.18
傍観体験のみ群	34	11.15
被害傍観体験群	21	17.38
いじめ体験全てあり群	10	18.60

いじめ体験の種類によって、どの群間でいじめ体験後の否定的な内容の精神的変化の平均値に差があったのかを確認するために Tukey-Kramer 法を用いた多重比較分析を行った結果、被害体験のみ群と傍観体験のみ群、傍観体験のみ群と被害傍観体験群、傍観体験のみ群といじめ体験全てあり群において有意な差がみられた。図2には、いじめ体験のそれぞれの種類におけるいじめ体験後の否定的な内容の精神的変化の平均値の多重比較分析の結果を示した。また、表4にはいじめ体験の種類ごとの人数といじめ体験後の否定的な内容の精神的変化の平均値を示した。図2と表4によると、被害体験のみ群のいじめ体験後の否定的な内容の精神的変化の平均値は18.18、傍観体験のみ群の平均値は11.15、被害傍観体験群の平均値は17.38、いじめ体験全てあり群の平均値は18.60だった。

以上から、被害体験のみ群は傍観体験のみ群に比べていじめ体験後に否定的な精神的変化が大きかったことがわかった。同様に、被害傍観体験群は傍観体験のみ群より、そしていじめ体験全てあり群は傍観体験のみ群より、いじめ体験後に否定的な精神的変化が大きかったことがわかった。

(b)「積極的な内容」因子

t検定の結果,「積極的な内容」因子を含む質問項目の平均値では,被害体験あり群と被害体験なし群間において有意な差がみられた($t=-5.46, df=80, p<.01$)。

表5には,被害体験あり群と被害体験なし群の人数,いじめ体験後の積極的な内容の精神的変化の平均値,標準偏差(SD)とt検定の結果を示した。表5によると,被害体験あり群の平均値は8.30,被害体験なし群の平均値は6.03であった。

以上から,いじめ被害体験をした者は,被害体験をしなかった者に比べ,いじめ体験後に積極的な内容の精神的変化が大きかったことがわかった。

表5. いじめ体験後の積極的な内容の精神的変化における被害体験あり群と被害体験なし群の人数,平均値,標準偏差(SD)およびt検定結果

	人数	平均(SD)	t 値
被害体験あり群	46	8.30(2.05)	-5.47**
被害体験なし群	36	6.03(1.61)	

** $p<.01$

しかし,傍観体験あり群と傍観体験なし群,加害体験あり群と加害体験なし群の各群間では有意な差はみられなかった(傍観体験あり群と傍観体験なし群: $t=1.54, df=20.40, n.s.$,加害体験あり群と加害体験なし群: $t=-.91, df=80, n.s.$)。

表6. いじめ体験あり群の各群におけるいじめ体験後の積極的な内容の精神変化の平均値の一元配置分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F	P 値
いじめ体験の種類	80.80	3	26.93	7.74	.000**
誤差	250.40	72	3.48		
合計	331.20	75			

** $p<.01$

さらに,被害体験のみ群,傍観体験のみ群,被害傍観体験群,いじめ体験全てあり群の4群間において,いじめ体験後の積極的な内容の精神的変化の平均値に有意な差が見られるか確認するために一元配置分散分析を行った結果,4群間で有意な差がみられた($F(3,72)=7.74, p<.01$)。

表6には,被害体験のみ群,傍観体験のみ群,被害傍観体験群,いじめ体験全てあり群の4群間におけるいじめ体験後の積極的な内容の精神的変化の平均値の一元配置分散分析結果を示した。

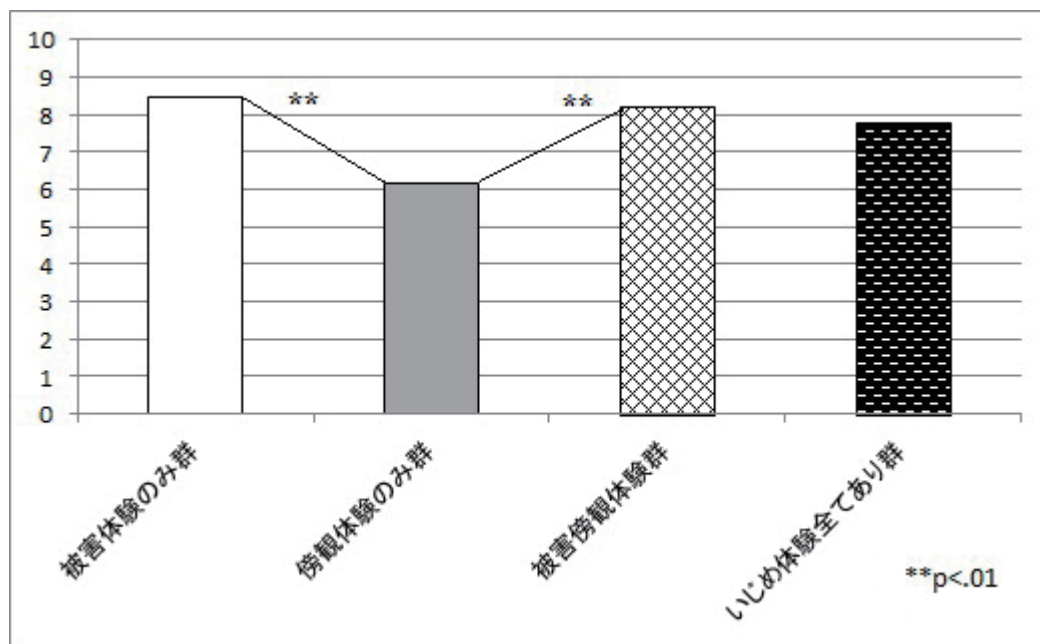


図3. いじめ体験あり群の各群におけるいじめ体験後の積極的な内容の精神的変化のいじめ体験の平均値の多重比較分析結果

表7. いじめ体験の種類ごとの人数といじめ体験後の積極的な内容の精神的変化における平均値

いじめ体験の種類	人数	平均値 (SD)
被害体験のみ群	11	8.45(2.58)
傍観体験のみ群	34	6.15(1.56)
被害傍観体験群	21	8.24(1.87)
いじめ体験全てあり群	10	7.80(1.93)

いじめ体験の種類によって、どの群間でいじめ体験後の積極的な内容の精神的変化の平均値に差があったのかを確認するために Tukey-Kramer 法を用いた多重比較分析を行った結果、被害体験のみ群と傍観体験のみ群、傍観体験のみ群と被害傍観体験群において有意な差がみられた。

図3には、いじめ体験あり群の各群におけるいじめ体験後の積極的な内容の精神的変化の平均値の多重比較の結果を示した。また、表7には、いじめ体験の種類ごとの人数といじめ体験後の積極的な内容の精神的変化の平均値を示した。図3と表7によると、被害体験のみ群のいじめ体験後の積極的な内容の精神的変化の平均値は8.45、傍観体験のみ群の平均値は6.15、被害傍観体験群の平均値は8.24、いじめ体験全てあり群の平均値は7.80だった。

以上から、被害体験のみ群は傍観体験のみ群に比べて、いじめ体験後に積極的な内容の精神変化が大きかったことがわかった。同様に、被害傍観体験群は傍観体験のみ群よりいじめ体験後に積極的な内容の精神変化が大きかったことがわかった。

3. いじめ体験あり群間におけるレジリエンス尺度の因子ごとの差

レジリエンス尺度において、先行研究である荒木(2002)の研究結果から、質問項目が「愛他

的信念」,「人生肯定」,「愛される価値」の確信」の3つの因子構造に分かれていることを参考にし、レジリエンス尺度の各因子の平均値において、いじめ体験あり群といじめ体験なし群、被害体験あり群と被害体験なし群、傍観体験あり群と傍観体験なし群、加害体験あり群と加害体験なし群の各群間で有意な差があるかを確認するためにt検定を行った。

さらに、被害体験のみ群、傍観体験のみ群、被害傍観体験群、いじめ体験全てあり群の4群間において、各因子のレジリエンスの平均値に有意な差がみられるか確認するため一元配置分散分析とTukey-Kramer法を用いた多重比較分析を行った。

(a)「愛他的信念」因子

t検定の結果、「愛他的信念」因子を含む質問項目の平均値では、いじめ体験あり群といじめ体験なし群、被害体験あり群と被害体験なし群、傍観体験あり群と傍観体験なし群、加害体験あり群と加害体験なし群のどの群間においても有意な差は見られなかった(いじめ体験あり群といじめ体験なし群： $t=-1.47, df=102, n.s.$, 被害体験あり群と被害体験なし群： $t=-1.03, df=102, n.s.$, 傍観体験あり群と傍観体験なし群： $t=-.23, df=102, n.s.$, 加害体験あり群と加害体験なし群： $t=.79, df=102, n.s.$)。

また、被害体験のみ群、傍観体験のみ群、被害傍観体験群、いじめ体験全てあり群の4群間において、「愛他的信念」因子のレジリエンスの平均値に有意な差が見られるか確認をするために一元配置分散分析を行った結果、有意な差はみられなかった($F(3,72)=1.00, n.s.$)。

(b)「人生の肯定」因子

t検定の結果、「人生の肯定」因子を含む質問項目の平均値では、いじめ体験あり群といじめ体験なし群、被害体験あり群と被害体験なし群、傍観体験あり群と傍観体験なし群、加害体験あり群と加害体験なし群の各群間において有意な差は見られなかった(いじめ体験あり群といじめ体験なし群： $t=-.33, df=102, n.s.$, 被害体験あり群と被害体験なし群： $t=1.65, df=102, n.s.$, 傍観体験あり群と傍観体験なし群： $t=.87, df=102, n.s.$, 加害体験あり群と加害体験なし群： $t=.46, df=102, n.s.$)。

表 8. 「人生の肯定」因子における各種類のいじめ体験の平均値の一元配置分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F	P 値
いじめ体験の種類	382.27	3	127.42	2.87	.042*
誤差	3196.8	72	44.33		
合計	3574.36	75			

* $p<.05$

また、被害体験のみ群、傍観体験のみ群、被害傍観体験群、いじめ体験全てあり群の4群間において、「人生の肯定」因子のレジリエンスの平均値に有意な差が見られるか確認をするために一元配置分散分析を行った結果、有意な差がみられた($F(3,72)=2.87, p<.05$)。表 8 には、いじめ体験あり群の各群における「人生の肯定」因子の平均値の一元配置分散分析結果を示した。

さらに、いじめ体験の種類によって、どの群間で「人生の肯定」のレジリエンスの平均値差があったかを確認するため、Tukey-Kramer法を用いた多重比較分析を行った結果、傍観体験の

み群といじめ体験全てあり群間において有意な差がみられた。

図4には、いじめ体験あり群の各群における「人生の肯定」因子のレジリエンス平均値の多重比較分析の結果を示した。また、表9には、いじめ体験の種類ごとの人数と「人生の肯定」因子のレジリエンスの平均値を示した。図4と表9によると、有意差がみられた傍観体験のみ群の「人生の肯定」因子のレジリエンスの平均値は32.35、いじめ体験全てあり群の平均値は25.80だった。

以上のように、傍観体験のみ群の「人生の肯定」因子のレジリエンス平均値がいじめ体験全てあり群の平均値より大きかったことから、いじめ体験全てあり群は傍観体験のみ群より人生の肯定ができていないことがわかった。

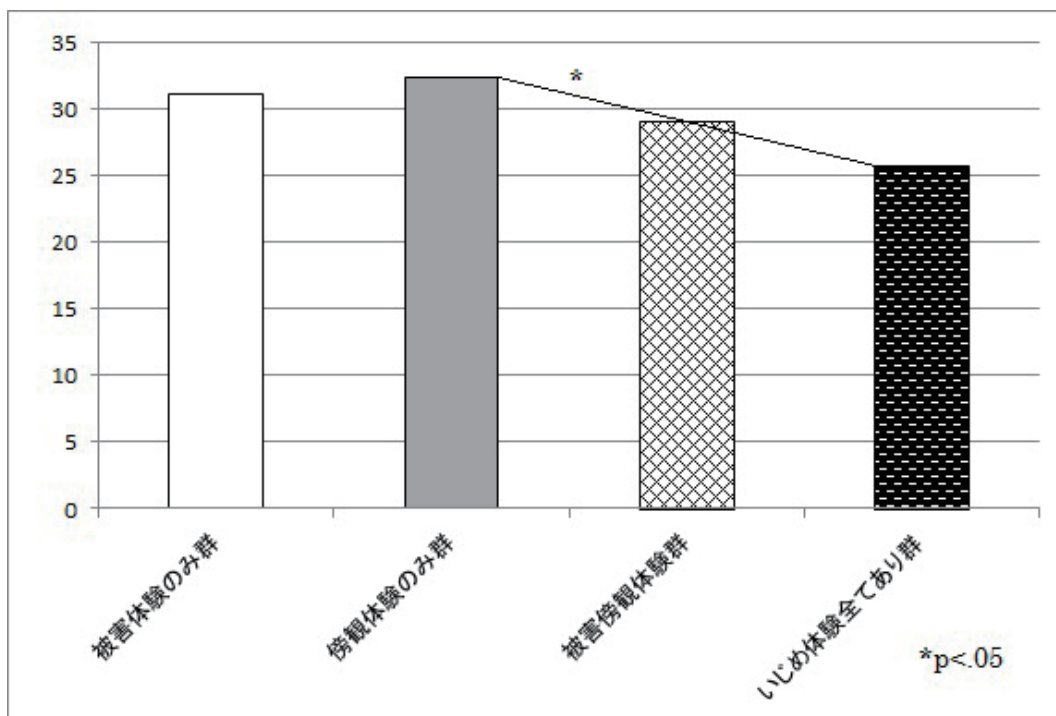


図4. いじめ体験あり群の各群における「人生の肯定」因子のレジリエンス平均値の多重比較分析結果

表9. いじめ体験の種類ごとの人数と「人生の肯定」因子のレジリエンスの平均値

いじめ体験の種類	人数	平均値 (SD)
被害体験のみ群	11	31.09(4.97)
傍観体験のみ群	34	32.35(7.35)
被害傍観体験群	21	29.10(7.13)
いじめ体験全てあり群	10	25.80(3.99)

(c) 「“愛される価値”の確信」因子

t検定の結果、「愛他的信念」因子を含む質問項目の平均値では、いじめ体験あり群といじめ体験なし群、被害体験あり群と被害体験なし群、傍観体験あり群と傍観体験なし群、加害体験あり群と加害体験なし群のどの群間においても有意な差は見られなかった（いじめ体験あり群といじめ体験なし群： $t=-.15, df=102, n.s.$ 、被害体験あり群と被害体験なし群： $t=.67, df=102, n.s.$ 、傍観体

験あり群と傍観体験なし群： $t=1.19, df=102, n.s.$ 、加害体験あり群と加害体験なし群： $t=.51, df=102, n.s.$ ）。

また、被害体験のみ群、傍観体験のみ群、被害傍観体験群、いじめ体験全てあり群の4群間においても、「「愛される価値」の確信」因子のレジリエンスの平均値に有意な差が見られるか確認をするために一元配置分散分析を行った結果、有意な差はみられなかった ($F(3, 72)=1.56, n.s.$)。

4. いじめ体験あり群間におけるアサーション尺度の因子ごとの差

アサーション尺度において、先行研究である玉瀬ら（2001）の研究結果から、質問項目が「関係形成」因子と「説得交渉」因子の2つの因子構造に分かれていることを参考にし、アサーション尺度の各因子の平均値において、いじめ体験あり群といじめ体験なし群、被害体験あり群と被害体験なし群、傍観体験あり群と傍観体験なし群、加害体験あり群と加害体験なし群の各群間に有意な差があるかを確認するためにt検定を行った。

さらに、被害体験のみ群、傍観体験のみ群、被害傍観体験群、いじめ体験全てあり群の4群間において各因子のアサーションの平均値に有意な差が見られるかを確認するために一元配置分散分析とTukey-Kramer法を用いた多重比較分析を行った。

(a) 「関係形成」因子

「関係形成」因子を含む質問項目の平均値では、いじめ体験あり群といじめ体験なし群との間に有意な差がみられた ($t=-2.00, df=102, p<.05$)。

表10には、いじめ体験あり群といじめ体験なし群の人数、「関係形成」因子におけるアサーションの平均値、標準偏差 (SD) とt検定の結果を示した。表10によると、いじめ体験あり群の平均値が27.68、いじめ体験なし群が25.55であった。

以上から、いじめ体験あり群はいじめ体験なし群に比べ、相手と良好な関係を形成しようと努めることがわかった。

表10. 「関係形成」因子におけるいじめ体験あり群といじめ体験なし群の人数、平均値、標準偏差 (SD) とt検定結果

	人数	平均 (SD)	t 値
いじめ体験あり群	82	27.68(4.41)	-2.00*
いじめ体験なし群	22	25.55(4.60)	

* $p<.05$

しかし、被害体験あり群と被害体験なし群、傍観体験あり群と傍観体験なし群、加害体験あり群と加害体験なし群間においては有意な差はみられなかった（被害体験あり群と被害体験なし群： $t=-1.02, df=102, n.s.$ 、傍観体験あり群と傍観体験なし群： $t=.05, df=102, n.s.$ 、加害体験あり群と加害体験なし群： $t=.40, df=102, n.s.$ ）。

また、被害体験のみ群、傍観体験のみ群、被害傍観体験群、いじめ体験全てあり群の4群間において、「関係形成」因子のアサーションの平均値に有意な差がみられるか確認をするために一元配置分散分析を行った結果、有意な差はみられなかった ($F(3, 72)=1.67, n.s.$)。

(b)「説得交渉」因子

t検定の結果,「説得交渉」因子を含む質問項目の平均値では, いじめ体験あり群といじめ体験なし群, 被害体験あり群と被害体験なし群, 傍観体験あり群と傍観体験なし群, 加害体験あり群と加害体験なし群のどの群間においても有意な差はみられなかった(いじめ体験あり群といじめ体験なし群: $t=-.83, df=102, n.s.$, 被害体験あり群と被害体験なし群: $t=.24, df=102, n.s.$, 傍観体験あり群と傍観体験なし群: $t=.80, df=102, n.s.$, 加害体験あり群と加害体験なし群: $t=1.46, df=102, n.s.$)。

表 11.「説得交渉」因子における各種類のいじめ体験の平均値の一元配置分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F	P 値
いじめ体験の種類	170.74	3	56.91	2.79	.046*
誤差	1467.68	72	20.38		
合計	1638.42	75			

* $p<.05$

また, 被害体験のみ群, 傍観体験のみ群, 被害傍観体験群, いじめ体験全てあり群の4群間において,「説得交渉」因子のアサーションの平均値に有意な差がみられるかを確認するために一元配置分散分析を行った結果, 有意な差がみられた($F(3,72)=2.79, p<.05$)。表 11 には,「説得交渉」因子における各種類のいじめ体験の平均値の一元配置分散分析結果を示した。

また, いじめ体験の種類によって, どの群間で「説得交渉」のアサーションの平均値差があったのかを確認するため, Tukey-Kramer 法を用いた多重比較分析を行った結果, 被害体験のみ群といじめ体験全てあり群間において有意な差がみられた。

図 5 には, いじめ体験あり群の各群における「説得交渉」因子のアサーションの平均値の多重比較の結果を示した。また, 表 12 には, いじめ体験の種類ごとの人数と「説得交渉」因子のアサーションの平均値を示した。図 5 と表 12 によると, 有意差がみられた被害体験のみ群の「説得交渉」因子のアサーションの平均値は 26.55, いじめ体験全てあり群の平均値は 21.20 だった。

以上のように, 被害体験のみ群の「説得交渉」因子のアサーション平均値がいじめ体験全てあり群の平均値より大きかったことから, いじめ体験全てあり群は被害体験のみ群より葛藤場面において相手に説得や交渉を試みることができていないことがわかった。

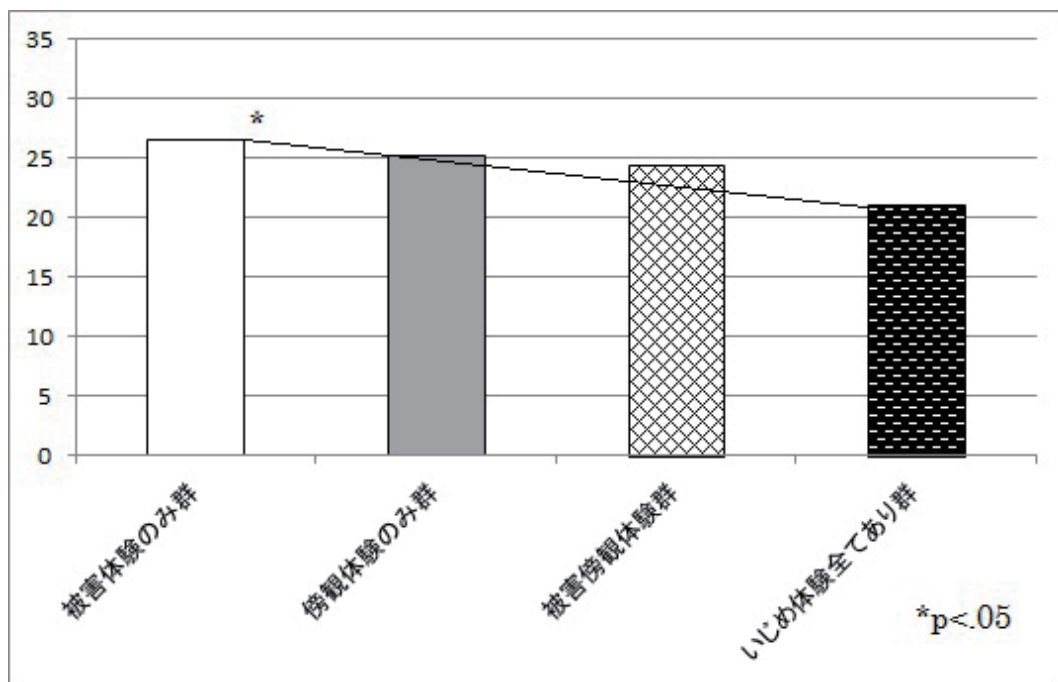


図5. いじめ体験あり群の各群における「説得交渉」因子のアサーション平均値の多重比較分析結果

表 12. いじめ体験の種類ごとの人数と「説得交渉」因子のアサーションの平均値

いじめ体験の種類	人数	平均値 (SD)
被害体験のみ群	11	26.55(3.14)
傍観体験のみ群	34	25.24(4.51)
被害傍観体験群	21	24.48(5.30)
いじめ体験全部あり群	10	21.20(3.85)

5. レジリエンス尺度とアサーション尺度の関係

得られたデータからレジリエンス尺度とアサーション尺度の関係を確認するために相関分析を行った。その結果、レジリエンス尺度とアサーション尺度の間には、正の相関がみられた($r=.543, p<.01$)。

考察

本研究では、調査参加者のレジリエンスとアサーションを測定し、過去のいじめ体験の有無や種類からどのようにそのレジリエンスとアサーションが異なるのかを目的に調査を行った。

1. いじめを経験した調査対象者について

今回は104名の大学生を分析の対象としたが、過去に被害、傍観、加害体験のいずれかのうち、ひとつでもいじめ体験をしたことがある調査参加者は全体の78.9%、いずれの体験もしたことが

ない者は全体の21.1%であった。平成26年度版子ども・若者白書にて「いじめは常に起こっているものと考えられる」と示唆された通り、いじめは学校場面において多くの生徒が直面しうる深刻なストレスイベントであることが伺える。

2. いじめ体験後の精神的変化について

いじめ体験後の精神的変化については、いじめ被害体験あり群が被害体験なし群より「勉強や遊びなどのいろいろな活動に意欲がなくなった」、「人との付き合いが消極的になった」などの否定的な内容の精神的変化が大きかったことがわかった。さらに、被害体験のみ群、傍観体験のみ群、被害傍観体験群、いじめ体験全てあり群の4群で比較を行った結果、被害体験のみ群、被害傍観体験群、いじめ体験全てあり群の3群が傍観体験のみ群より、いじめ体験後に否定的な内容の精神的変化が大きかったことがわかった。

以上から、いじめ被害を経験した者は、傍観体験や加害体験を同時に経験していても、いじめ体験後にネガティブな精神的変化があったことが明らかになった。岡安・高山(2000)が「いじめ被害者は、ストレス症状が高い者が多く、抑うつ・不安傾向が高い」と指摘しており、今回の調査結果は先行研究の結果を追認することができると言える。いじめを受けた経験は、被害者自身でなければ実感することができない。そのため、いじめ被害体験者でしか知り得ないいじめを受けた悲しみや辛いネガティブな精神的変化があったのだと推測される。

一方、いじめ被害体験あり群は、被害体験なし群より「相手の気持ちを考えられるようになった」、「我慢強くなった」などの積極的な内容の精神変化が大きかったことも今回の調査でわかった。さらに群間別で検討した結果、被害体験のみ群と被害傍観体験群が傍観体験のみ群よりいじめ体験後に積極的な内容の精神的変化があったこともわかった。つまり、否定的な内容の精神的変化と同様に、被害体験者は非被害体験者、つまり被害体験をしていない者よりもいじめ体験後にポジティブな精神的変化があったことになる。これは、坂西(1995)が「いじめられ経験は被害者自身の苦しい体験の中から共感性を高め、被害者は逆境に負けないという積極的な意味を見出そうとする」という指摘を支持することができる結果になった。

以上から、積極的な内容の精神的変化も否定的な内容の精神的変化と同様に、いじめ被害体験者でしか知り得ない被害の経験から、いじめ非被害体験者より、自分の言動や行動で相手を傷つけるかと相手の立場になって物事を考えることができるようになり、相手の言動に嫌な気持ちになっても我慢するようになったということが推測される。

3. いじめ体験の有無や種類によるレジリエンス達成について

調査参加者のレジリエンス達成について、レジリエンス尺度の「希望に満ち溢れている」、「人生はいいものだ」などの項目を含んだ「人生の肯定」因子において、被害体験、傍観体験、加害体験の全てを経験した者は傍観体験のみを経験した者より人生の肯定ができていないことが明らかになった。

荒木(2005)は、「いじめ被害者の現在の抑うつ状態及び不安の程度が軽度なほどレジリエンスを達成している」と述べており、佐藤ら(2001)が考案した多次元抑うつ不安症状尺度を使用して調査参加者のレジリエンスを調査した。今回の筆者の研究で有意な差がみられたレジリエンス

尺度の「人生の肯定」因子に含まれる質問項目の内容と多次元抑うつ不安症状尺度に含まれる「気力にあふれるように感じる」、「自分の将来に希望をもっている」などのポジティブ情動に関係した項目の内容が類似しているために有意な差が確認できたと考えられる。

荒木(2005)や坂西(1995)は、いじめ被害体験者のいじめ後の長期的な精神的影響を調査し、いじめ被害体験者は抑うつ状態や不安がいじめ体験後にも続いていることを明らかにした。また、Olweus(1993)も、いじめ被害の後遺症とも呼べる不適応状態(抑うつ)が少なくとも7年から10年ほど持続するという結果を調査から明らかにしている。以上のように、いじめ被害体験者はいじめ体験後に不適応状態が続いていることがわかったが、今回の調査において、いじめ被害体験者と非被害体験者の「人生の肯定」因子を含むレジリエンスの平均値を比較してみると、被害体験者のほうが非被害体験者よりも人生の肯定ができていない傾向にあったが、有意な差は確認できなかった。

前述の荒木(2005)や坂西(1995)、Olweus(1993)が報告したように、いじめ被害を体験した者のその後の精神的な影響は大きい。しかし、岡安・高山(2000)の研究で、いじめ加害者はいじめ加害後に不機嫌・怒りや無気力のレベルが高くなることが明らかになったように、加害者にもネガティブな精神的影響もあると示唆された。そして、被害体験と加害体験が入れ替わるような学校環境での傍観体験は加害者にも被害者にもなりうる不安定な状態が続く立場であると考えられることから、被害体験、傍観体験、加害体験のその3つ全ての経験は非常に心理的ストレスの高いものであったと推測できる。

一方、傍観体験のみ群は、いじめ被害も加害も経験しておらず、傍観体験のみをしていたため、いじめ体験あり群の中では、いじめ体験をしたことがない者に最も近い存在であると言えるだろう。

以上の要因から、レジリエンス尺度の「人生の肯定」因子においていじめ体験全てあり群と傍観体験のみ群に有意な差が確認されたと考えられる。

しかし、今回の調査では、「困っている人を助けたい」、「人生で大切なことは誰かの役に立つことだ」などの項目で構成された「愛他的信念」と「自分を愛してくれる人がいるはずだ」などの項目で構成された「“愛される価値”の確信」においていじめ体験あり群といじめ体験なし群の間で有意な差がみられなかった。同様に、被害体験者、傍観体験者、加害体験者など、全ての群間においても有意な差を確認することができなかった。

今回の研究にて「愛他的信念」因子と「“愛される価値”の確信」因子においてそれぞれの群で違いがみられなかった理由として、本研究で使用したレジリエンス尺度の内容が、「いじめ」からのレジリエンス測定に適していなかったことが考えられる。今回使用したJew,Green&Kroger(1999)のレジリエンス尺度は、背景にある概念としてMrazekら(1987)の児童期に虐待を受けた者を対象としたレジリエンスの特徴を採用している。今回の調査では、レジリエンス尺度とアサーション尺度の間に正の相関がみられたが、いじめ体験からのレジリエンスと虐待を受けた児童のレジリエンスの内容に差異があったため、有意な差がみられなかったのではないかと推測する。

4. いじめ体験の有無や種類によるアサーションについて

アサーションについては、いじめ体験者がいじめを体験していない、つまりいじめ非体験者に比べて「友達に頼み事をしたいときには率直に言う」や「好意をもった相手には自分から話しかける」などの関係形成に関連した項目の平均値が高かったことから、いじめ体験者はいじめ非体験者より相手とよい関係を形成しようと努めることが伺える。

いじめ体験者が相手とよい関係を形成しようと努めるのは、いじめ体験の種類ごとのそれぞれのいじめ体験後の精神的変化に関係があると考えられる。今回の調査では、被害体験、傍観体験、加害体験それぞれにおいて有意な差を確認することはできなかった。しかし、被害体験者の場合は、坂西（1995）の調査結果のように、いじめ被害者はその経験から他者への共感性を高めるため、相手の気持ちを理解しようと努めるだろう。また、傍観者の場合も坂西（1995）が「いじめられ体験のない者は、自分のもつ既存の知識を動員することによって被害者の心理的・身体的状態を間接的に推測する」と述べているように、いじめられていた被害者を見て見ぬ振りしてしまった経験から被害者の気持ちを感じ取り、他者への共感性を高めるであろう。最後に加害体験者の場合、今回は有意な差が認められなかったが、いじめ加害者のいじめ体験後の否定的な精神的変化が、加害体験をしていない者よりも大きかったことから、少なからずいじめてしまった罪悪感や後悔などがあることが示唆される。過去のいじめてしまった経験が相手と良好な関係を形成しようとする現在のアサーションに影響している可能性があると言える。

以上のように、それぞれの過去のいじめ体験後の精神的変化により、自分の気持ちも大事にしつつ、相手のことを理解し、尊敬した上で良好な関係を作っていこうと努めると推測する。

次に、「買った商品に欠陥があったら交換してもらう」、「親に反対されそうなことでも必要なら言う」など、何らかの葛藤場面において相手を説得や交渉することに関係する「説得交渉」因子のアサーションの平均値では、いじめ体験全てあり群と被害体験のみ群間に有意な差が確認された。被害体験のみ群の「説得交渉」因子のアサーション平均値がいじめ体験全てあり群の平均値より高かったことから、被害体験、傍観体験、加害体験の全て体験した者は、被害体験のみをした者より、葛藤場面において相手を説得したり交渉したりすることができていないことがわかった。つまり、いじめ体験全てあり群の者は、被害体験のみ群の者より葛藤場面において自身の考えや感じていることを口に出せていないことになる。

葛藤場面での説得や交渉は、日常場面で相手と良好な関係を築こうと努める場合と異なり、意見の相違から相手と衝突してしまう可能性が大きいであろう。レジエンスの「人生の肯定」でも述べたように、被害体験、傍観体験、加害体験のその3つ全ての経験は非常に心理的ストレスの高いものであったと推測できることから、喧嘩に発展しうる場面でトラブルを回避するために敏感に相手の気持ちを察し、自身の気持ちを押し殺してしまうのではないかと推測する。

5. 総合検討

本研究の調査から、いじめ体験からのレジリエンス達成とアサーションについて、被害体験、傍観体験、加害体験の全てを経験した者は人生の肯定ができていなく、葛藤場面において自分の気持ちを押し殺してしまうことが明らかになった。つまり、いじめの役割を全て経験した者への心理的ケアの重要性が示唆されたと強く言える。

これまでの先行研究では、いじめ被害者に着目した研究が多くなされており、傍観者や加害者に着目しても、全てを体験した者に注目した研究はされていない。いじめの役割を全て体験した者により着目したいじめ問題の研究が今後のいじめ体験からのレジリエンスやその後のアサーションの因果関係を紐解く鍵になると言えるだろう。

本研究の改善点としては、加害体験のみ群が2名、傍観加害体験群が0名、そして被害加害体験群が4名であったため、全ての群で分析することができなかった点である。その理由としては、いじめの種類を調査参加者に尋ねる際、被害体験と傍観体験など複数回答を可能にして回答を求めたが、その3群は加害体験に関係しているため、自身がいじめをしてしまったという自責の念から調査参加者の正直な回答が得られなかったことが考えられる。また、加害体験そのものを覚えていない、あるいは自分の行為がいじめだったとわからない場合があるだろう。そのため、今後調査を行なう際は、確実に全ての群で分析が行えるよう予備調査を行う必要があると考える。

さらに、レジリエンスについても今回の調査では、「愛他的思念」因子と「愛される価値」の確信」因子においてどの群間においても有意な差を確認することができなかった。いじめ体験からのレジリエンスを測定できるよう、よりいじめに即した尺度の使用の検討が必要であろう。

また、今回の調査では、いじめ体験を被害体験、傍観体験、加害体験と大きく3つにわけたが、森田・清永(1994)はいじめを、被害者・加害者・傍観者・観衆と4層の構造として考えている。「観衆」とは、いじめに直接手を下さないが、まわりでおもしろがり、時にははやし立て、いじめという炎に油を注ぐ存在であると森田ら(1994)は述べている。このように、いじめの構造や役割が複雑化していることを考慮し、調査を行う必要があると考える。

最後に、いじめ体験とレジリエンス、そしてアサーションに関連があることが本研究にて示唆されたことから、既に教育場面で行われているアサーショントレーニングはいじめを防ぐ面においても、いじめを体験した生徒のその後のサポートとしても非常に大きな有効性があると言えるだろう。

山折(2013)は精神科医との対談で「いじめは差別であり、なくなることはない」と述べているように、いじめ問題の解決は非常に難しい。いじめ体験からのレジリエンス達成とアサーションの今後の更なる研究は、いじめを防ぐだけでなく、いじめ体験者のその後のケアに繋がるであろう。

【文献】

- Alberty,R.E.&Emmons,M.L.(1975). Stand up, speak out, talk back: The key to assertive behavior. Impack Publishes.
- 荒木剛(2002). いじめ被害体験の長期的影響とレジリエンシー(resiliency) 性格心理学研究,10,108-109.
- 荒木剛(2005). いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンス(resilience)に寄与する要因について パーソナリティ研究,14,54-68.
- Jew,C.L.,Green,K.E.,&Kroger,J.(1999). Development and validation of a measure of resiliency. Measurement and Evaluation in Counseling and Development,32,75-89.
- 平木典子(1993). アサーショントレーニングーさわやかな自己表現>のためにー 日本・精神技術研究所 24-25
- Luthar,S.S.,Cicchetti,D.,&Becker,B.(2000). The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future works. Child Development, 71, 543-562.

- 文部科学省(2006). いじめ問題への文部科学省の取り組み いじめの定義(児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査<<http://www.mext.go.jp/ijime/detail/1336269.htm>>(2015年9月13日)
- 内閣府(2014). 子ども・若者白書(全体版) 3章生育環境 第1節教育 3学校に係わる問題 (1)いじめ <http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/b1_03_01.html>(2014年12月7日)
- Masten, A.S., & Reed, M.J. (2002). Resilience in development. In C.R. Snyder, S.J. Lopez (Eds.), *Handbook of positive psychology*. New York: Oxford University Press. 74-88.
- 森田洋司・清永賢二(1994). 新訂版 いじめ 教室の病い 金子書房 46-49.
- Mrazek, P.J., & Mrazek, D.A. (1987). Resilience in child maltreatment victims: A conceptual exploration. *Child Abuse & Neglect*, 11, 357-366.
- 岡安孝弘・高山巖(2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- Olweus, D. (1993). Victimization by peers: Antecedents and long-term outcomes. In K.H. Rubin, & J.B. Asendorpf (Eds.), *Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. 315-341.
- 齊藤友範(2000). 第5章 傍観者の意識構造といじめの集団構造 東京大学 学校臨床研究, 1(1), 38-48.
- 坂西友秀(1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115.
- 佐藤徳・安田朝子・児玉千稲(2001). 3要因モデルに基づく、抑うつならびに不安症状の分類：多次元抑うつ不安症状尺度の作成 性格心理学研究, 10, 15-26.
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代(2001). 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 奈良教育大学紀要, 50, 221-232.
- Wagnild, G.M., & Young, H.M. (1993). Development and psychometric evaluation of the resilience scale, *Journal of Nursing Measurement*, 1, 165-178.
- 山折哲雄・柳美里(2013). 人はなぜいじめめるのか—その病理とケアを考える— 生野照子・山岡昌之・鈴木真理(編) 株式会社シービーアール5-6.